

# 巻 頭 言

## 帰納法と演繹法

仙台青葉学院短期大学学長  
藤 村 重 文

今年春の陽気から急に冬に逆戻りするような現象が何度かあり、桜の開花時期が遅れた。このところ日本では毎年異常気象だが、世界各地でも同じようなことがおこっているのをみると、これは世界的な現象と思われる。加えてヨーロッパでは、4月中旬のアイスランドの火山噴火による火山灰と噴煙の気象への影響が今後懸念されている。

桜の開花には気温を変数にした花芽の成長速度の計算式があるほど、気温の経過が影響することがよく知られている。気象庁による計算式は、起算日から温度変換日数を積算して開化を予測するものであるが、温度変換日数は、花芽の生長速度を標準温度15度の1日分の成長量とその前後の温度を比較して、日数で計算したものである。しかしながらこの式は、現在もはや開花予測には使われていないということである。都市部やその近郊や田園地帯などの間には環境条件の変動に差があり、温度だけを変数にした単純な式が成立しないのは当然であろう。自然現象を蓋然性の高い数式化するのは難しく、多変量式を用いようとしても、桜の開花時期を計算すること自体が誤った命題なのである。

筆者が携わってきた臨床医学における多くの研究は、「個々の特殊な事実や命題の集まりからそこに共通で一般的な命題や法則を導き出す」（大辞林）といったような、帰納的な方法がとられるものが多く、エビデンスレベルによって評価される。一方基礎医学では実験が厳密に行われて得られた結果が一般的法則に照らして正しいと認められるならば、それから導き出された推論は正しいのである。一般法則につながるような厳密な演繹的手法による研究の結果に対する評価は高い。

筆者は、時季的に桜の木が多い道を選んで朝の散歩をしているが、道すがら大通りに面したある寺の入口の掲示板に「心にあたたかさを ことばに美しさを」と書かれていた。言葉はそれを話す人と分離できないものであり、そのため言葉の美しさはそれを話す人物の心の美しさを表している。「心にあたたかさを ことばに美しさを」という一行は心と言葉が一致していることを思わせ、心地よく響く。

このたび発刊された「青葉」第1巻2号のそれぞれよく推敲された論文を深く味わってほしいと思う。